



介護福祉施設

Disaster Social Engineering Laboratory, Gunma Univ.



Disaster Social Engineering Laboratory, Gunma Univ.

鶴住居地区住民(浦山氏)撮影



鶴住居小学校

Disaster Social Engineering Laboratory, Gunma Univ.



ごさいしよの里

Disaster Social Engineering Laboratory, Gunma Univ.



釜石で伝えた【避難の3原則】

【想定にとらわれるな】 「ハザードマップを信じるな!」

浸水想定区域はあくまで“想定外力”に基づくものであって、
それ以上の災害が起こる可能性があると思え
(浸水想定区域外であったにもかかわらず、避難対策をしっかりとっていた)

【最善を尽くせ】

「ここまで来ればもう大丈夫だろう」ではなく、
そのときできる最善の対応行動をとれ
(予め決めておいた避難所よりも、さらに高台へ避難した)

【率先避難者たれ】

いざというときには、まず自分が避難すること
その姿を見て、他の人も避難するようになり、
結果的に多くの人を救うことが可能となる
【避難する中学生を見て、小学生は校外へ避難した】

【率先避難者たれ】

- …正常化の偏見※を打ち破る
- …同調性バイアスでみんなを巻き込む

※正常化の偏見「自分は大丈夫」

- …自分にとって都合の悪い情報を無視したり、
過小評価してしまう人間の特性

ex)逃げない非常ベル…初着のリスク情報の無視

釜石の子どもたちに教えてきたこと

○ 姿勢の防災教育

防災に対し主体的な「姿勢」を醸成する

× 脅しの防災教育

恐怖喚起のコミュニケーション

＝外圧的に形成される危機意識は長続きしない

× 知識の防災教育

＝与えられる知識は主体的な姿勢を醸成しない。

災害イメージの固定化をまねく……想定にとらわれる

釜石小学校の避難状況(1)

地震発生当日、短縮授業であったため、津波襲来時にほぼ全児童が学校管理下になかった…
それにもかかわらず、犠牲者ゼロ!

エピソード1

1年生のある児童は、下校後、自宅に一人にいるときに地震が発生した。彼は学校で教えられたように、まずは大きな揺れから身を守るための行動をとる。そして、避難訓練で何度も確認した通りに、避難場所まで一人で避難を開始した。

エピソード2

一人で避難する低学年の児童の避難の手助けを、高学年の児童が行っていた。

エピソード3

祖母と二人で自宅にいるときに地震が発生した児童は、祖母の手を引いて急いで避難した。

釜石小学校の避難状況(2)

エピソード4

兄弟二人(2年生と6年生)で自宅にいるときに地震が発生した児童は、大きな揺れがおさまるのを待ち、どのような対応をすればよいのかを考えていた。すると、すぐに30cm程度の津波が自宅周辺に襲ってきた。その光景を見て、6年生の児童は、津波防災教育で視聴したビデオ「50cmの津波でも流されてしまう」を思い出し、外に避難することをやめて、二人で急いで自宅の2階、屋上へ駆け上がった。



学校教育:子どもを中心とした津波防災教育



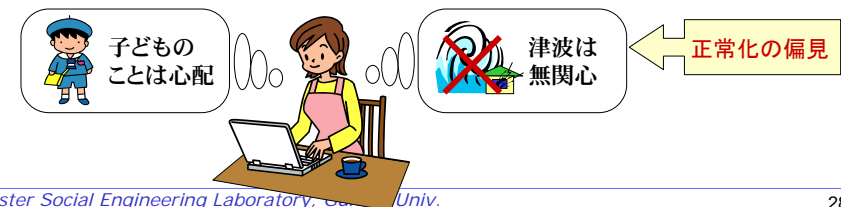
子どもの保護者世代

＝最も災害の関心が低い世代

＝仕事などを理由に防災講演会等に参加しない世代

＝もっとも接触するチャンネルが少ない世代

親として最大の保護対象である「子どもの生命を守る」ことに主眼を置いた取り組みから、保護者に対しても災害に備える習慣を身につけてもらう



子どもを介して親の関心を引き出す

子どもとその親を対象としたアンケート調査

Q. 家に一人で居る時に、大きな地震が発生しました。
あなたならどうしますか？

A. お母さんに電話する。

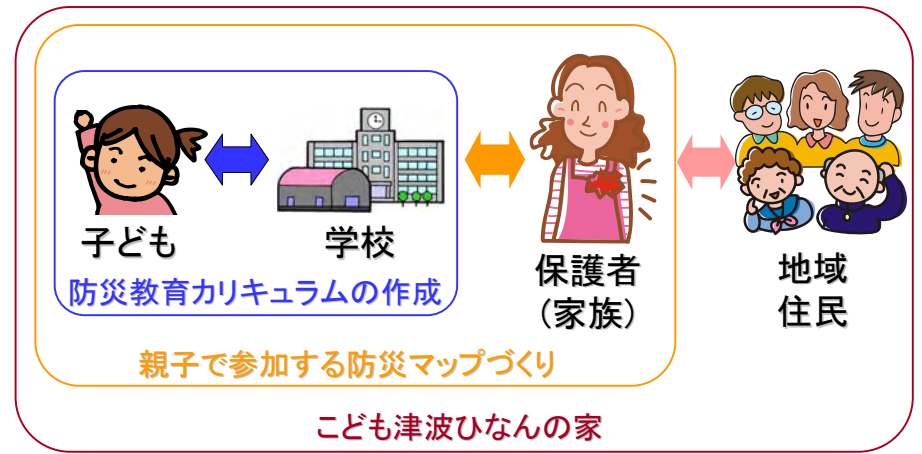


Q. お子さんの回答をご覧になって、
お子さんが津波に遭遇したとき、
無事に避難することができると思えましたか？

A. ...どちらともいえない

子どもの現状を示し、親に津波防災に取り組む動機をもってもらう

子どもを中心とした津波防災教育



子どもたちへの津波防災教育

津波のおそろしさ、
津波の特徴だけでなく、
避難の際の注意点など
災いをやり過ごす知恵を教える



ハザードマップは単なる一つの
シナリオに過ぎないこと、

状況に応じて、そのときにできる
最善を尽くすしかないと説く

子どもたちへの津波防災教育



自宅と通学路を書き込み、避難場所に印を付けることで、
自分だけのオリジナル津波避難場所マップをつくる